

国際サービスシステム メンテナンスニュース

VOL.2
2000/7/31

国際サービスシステム(株)

ブレーキオイルの話

暑い夏を迎え、過酷な条件で使用されているお車の状況はいかがでしょう？

今回は**重大事故**にもつながる**ブレーキオイル**の話です。

自動車の高速化・道路事情による渋滞・オートマ車の普及により

ブレーキの使用頻度が非常に高くなっています。

(リターダー付き車両・排気ブレーキ・シフトダウン機構など装着した車両は

ありますが！)それに伴いブレーキオイルは非常に過酷な条件下で使用

されています。**メンテナンスを怠ると**いろいろな**トラブル**が発生し

時には**重大事故**にもつながる可能性があります。

ブレーキオイルの劣化

ブレーキオイルはブレーキホース及びリザーバータンク・シリンダーのシール部

より空気中の水分を吸収する性質があります。

この為ブレーキオイルの最大の特徴である、高い沸点が維持できなくなります。

規格		沸点	
JIS	DOT	ドライ	ウエット
3種	3	205度以上	140度以上
4種	4	230度以上	155度以上
5種	5.1	260度以上	180度以上

左の表は各種ブレーキオイルの沸点の規格表ですが

どの種類のブレーキオイルも水分を吸水すると

沸点が低下します。(ウエット参照)

日本オートケミカル工業会において調査した結果

1年使用後 5%、2年使用後 6.5%と

水分吸湿量が増加する事がわかっています。

すなわち1年間使用したブレーキオイルの沸点はウエット沸点まで低下しています！

ベーパーロック現象

ブレーキオイルの沸点以上にブレーキの各シリンダーの温度が上昇すると、
ブレーキオイルの一部が気化し気泡が発生し、ブレーキを踏んでも働かない現象です。

よく箱根のターンパイク・日光のいろは坂などを下るとき、**エンジンブレーキ**を使用して
ください！という看板を目にします。これは**ベーパーロック現象**がおきブレーキが効かなく
なるおそれがあるので、**エンジンブレーキ**を使用してくださいという意味です。

ブレーキオイルの沸点低下は重大事故にもつながりますので、各メーカー基準の通りに

ブレーキオイルは1年に一度交換する事をお勧めいたします。

ブレーキオイルの注意・点検事項

1. ブレーキオイルの量を確認してください！

(オイル漏れがなくてもブレーキパッドの摩耗で
オイルレベルは減少します。)

2. 走行後リザーバータンクからブレーキオイルが
ふきこぼれた跡がある。

ブレーキオイル沸点が低下しています！

3. ブレーキオイルは作動油等のオイルと油種が
違います。補充・交換をする際はメーカー指定
ブレーキオイルを補充・交換してください！

当社のお客様であった話

→ モータープールに駐車中ブレーキオイルリザーバータンクにブレーキオイルでないオイル
を入れられブレーキがまったく効かなくなったとの事。くれぐれもご注意を！

国際サービスに相談してください！

4. **ブレーキホースもブレーキオイル沸点低下に密接な関係があります。車検毎の交換をお勧め致します。**

判らないこと、不明な点がありましたら連絡してください。

国際サービスシステムは7月1日から8月31日まで

サマーカーンでオイルが通常よりお求めやすくなっています。

ご利用お待ちしております。

